

「加曽利貝塚出土品」の指定について

1 種別

有形文化財（考古資料）

2 員数

112 号住居跡一括出土資料 149 点

内訳（異形台付土器 3 点・石棒 3 点・砥石 5 点・土偶 2 点・磨製石斧 1 点・軽石製品 3 点・丸玉 2 点・剥片石器 2 点・磨石類 1 点・石皿・台石 2 点・土器片錘 2 点・土器 123 点）

詳細は別紙 指定候補資料一覧（資料 1 - 2）のとおり

3 所有者

千葉市

4 所在地

千葉市若葉区桜木 8 丁目 3 3 番 1 号（千葉市立加曽利貝塚博物館内）

千葉市中央区南生実町 1 2 1 0 番地（千葉市埋蔵文化財調査センター内）

5 適用基準

各時代の遺物で、本市の歴史上重要と認められるもの

6 時代

縄文時代

7 説明

昭和 48（1973）年の発掘調査において検出された 112 号住居跡から、一括して出土した祭祀遺物であり、特別史跡加曽利貝塚を代表する資料である。

（1）112 号住居跡について

112 号住居跡は、昭和 57（1982）年に「特殊遺構」として報告されている（後藤他 1982）。東西約 16m×南北約 19mをはかる大型の遺構で、同遺跡内で確認されていた他の竪穴住居跡と比しても隔絶した大きさを有し、床面上から多くの祭祀遺物が出土した。

こうした事例は、古くは埼玉県真福寺貝塚での報告があげられるが、本遺構が報告された昭和 57（1982）年以降、同様の遺構の存在が全国で報告されるようになり、研究史上、縄文時代の大型住居跡が特殊な遺構として広く認識される契機となった調査事例の一つと捉えられる。

検出された覆土は薄く、床面直上から複数の祭祀遺物が出土した状況が報告されている。建物使用時もしくは廃絶直後に遺棄または廃棄されたものとみなせる。

本遺構は出土遺物ともに当該地域における縄文時代後・晩期における社会の変化、複雑化を示す、大型住居の代表的な例として引用されてきた（堀越 1997・阿部 2001・高橋 2001・2014・吉野 2007・西村 2015）。

(2) 異形台付土器について

特筆される出土遺物として、2 点の異形台付土器（資料 1-2 No.1・2）が挙げられる。大小 2 点で形状・装飾ともに異なっているが、全体として非常に似通った構成となっており、2 点一対で製作され、使用された可能性が高い。

1 は「横に倒れた状態でほぼ原形のまま出土した」。2 の発見時の状況は「床面上に正立の状態でおかれた本土器がちょうど上部からの土圧で押しつぶされた状態」(後藤 他 1982) であった。

体部に施されている互連弧充填縄文による木の葉状の表現は、1 は左右、2 は上下対称の構成となっている。

注口状突起には、1 は円管状工具による刺突。2 は縄文が施される。

使用されている縄文原体は 1 が単節 RL、2 が単節 LR であり、撚りが逆になっている。対置すると、1 は右下がり、2 は左下がりの条線となる。

2 点ともにほぼ完形であるが、2 の注口状突起は片側が欠損している。平成 11 年に樹脂により復元した。

異形台付土器は東関東地方を中心に、東北・北海道まで分布するが、2 点が一対となって出土した事例としては千葉県佐倉市井野長割遺跡や、東京都町田市広袴遺跡等に類例が見られるものの、ほぼ完全な形を呈する事例は全国的にも珍しく、非常に貴重な事例である。

同遺構からは、もう一点異形台付土器が出土している（資料 1-2 No.3）。赤彩された優品であり、全体に二次的な比熱により脆く、内面には炭素が付着したように黒色を呈する。

(3) その他の出土遺物について

上記の異形台付土器の他、床面上からは、「南南東に頭を向け二本並んで」石棒（資料 1-2 No.4・5）が、その周囲からは砥石（資料 1-2 No.7・8・9）が出土している。石棒の二次加工や軽石製品の研磨にかかわるものと推測できる。

この他、ヒスイ製の丸玉（資料 1-2 No.18~19）、土偶などが出土しており、遺構として祭祀的な様相が強い。

出土土器は規模に比して少数であり、小破片も多いが、ほぼ加曾利 B3 式に比定される資料であり、遺構も同時期のものと推定できる。

後晩期の遺構からは多くの遺物が混入することが常である。他の時期の遺物の混入が少ないことも特筆される。

千葉市を代表する考古学的な調査成果であり、出土状況が明らかな一対の異形台付土器と、一括して出土した遺物は、それを遺した縄文時代後期の社会や、縄文人の精神世界を垣間見ることのできる、非常に重要な文化財である。

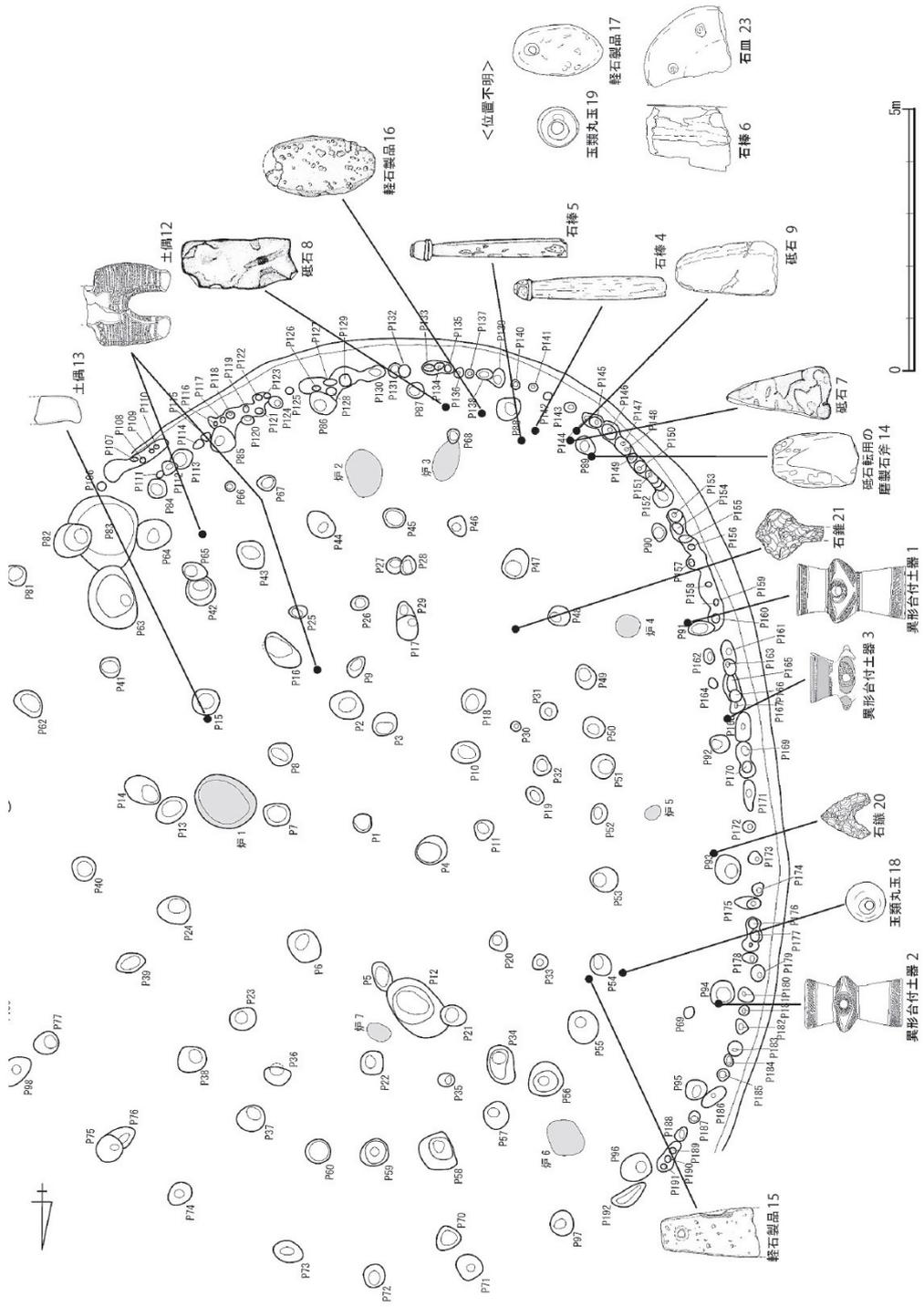


図 1 112号住居遺物出土状況 (『史跡加曾利貝塚総括報告書』7-5 図より改編)



写真1 112号住居跡 遺物出土状況 昭和48年



写真2 異形台付土器(1)出土状況 昭和48年



写真 3

奥：異形台付土器

左：石棒 右：砥石・浮子

【参考文献】

<報告>

後藤和民・庄司克・飯塚博和 1982 「加曾利貝塚東斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第 8 号（昭和 48 年）

千葉市教育委員会 2017 『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会

【研究論文】

<大型住居について>

阿部芳郎 2001 「縄文時代後晩期における大形竪穴建物址の機能と遺跡群」『貝塚博物館紀要』第 28 号

高橋龍三郎 2001 「縄文後晩期社会の複合化と階層化過程をどう捉えるかー居住構造と墓制よりみた千葉県遺跡例の分析」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』4

高橋龍三郎 2014 『縄文文化研究の最前線』

<異形台付土器・遺物出土状況について>

内田儀久 1978 「異形台付土器論 (I)」『奈和』16

内田儀久 1984 「異形台付土器論 (II)」『奈和 15 周年記念論文集』奈和同人会

内田儀久 1985 「異形台付土器用途考 上」『奈和』23

内田儀久 1986 「異形台付土器用途考 下」『奈和』24

菅谷通保 1985 「縄文時代特殊住居論批判-「大型住居」研究の展開のために-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』16

堀越正行 1997 「異形台付土器と土偶の背景」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集 (1)』勉誠社

蜂屋孝之 2013 「異形台付土器の検討」『縄文時代異形土器集成図譜』國學院大學文学部考古学研究室

中村耕作編 2013 『縄文時代異形土器集成図譜 I』國學院大學文学部考古学研究室

中村耕作 2021 「注口土器・香炉形土器の異形化・顔身体化と社会背景」『季刊考古学』155

西村広経 2015 「東関東における縄文時代後・晩期の竪穴住居儀礼」『東京大学考古学研究室研究紀要』29

西村広経 2020 「広域分布する異形土器」『東京大学考古学研究室研究紀要』33

吉野健一 2007 「房総半島における縄文時代後・晩期の大型住居」『縄文時代の社会考古学』